

その着まなしに理由アリ

文 中野香織

第11回



親しみやすさ、は抜群ですが。彼って、Sexy? Photo:Getty Images/AFLO

愛とは何かという議論と同じように、いやおそろくそれ以上は終わりはないのだろう。一人一人によって受け止め方が異なるうえ、時代や場所、文化によっても解釈が異なるからである。

とはいえ、グローバル化がすすむ現代、あくまでメディアを通したイメージにおいてだが、ほぼ誰もが納得するセクシーガイという人種は、いる。ブラッド・ピットにジョージ・クルーニー、そしてジョニー・デップは、地球上の老若男女の多くが認める(少なくとも反論はあまり出ない)セクシー三大王と見える。

さてそこで、「ピープル」誌が2007年「世界一セクシーな男」としてナンバーワンに選んだのは、マット・デイモンであった。たしかに2006年は「フォーブス」誌が選ぶ「出演料あたりの興行収入ランキング」のトップに選ばれるわ、シリーズ3作目の「ボーン・アルティメイタム」も大成功させるわ、いまハリウッドでいちばん稼げる俳優であるという事は誰もが知っている。「ジーンズが似合う男」「デートしてみたい男」などの各種ランキングは、こんな話題性を反映したランキングという性格をもつことも了解している。

それにしても、「世界一セクシーな男」がマット・デイモンであったのは一人や二人ではないようである。この選出に対し、意外感をもったのは一人や二人ではないようである。

本誌編集部からも疑問が提示された。「男の目からはマット・デイモンのどこがセクシーなのか、正直いってよくわからない。アメリカと日本ではセクシーの意味が違うのか?」男の目から見た男のセクシーと、女目線で見えたセクシーは別物なのか? 納得のいく説明がほしい」と。

理屈や根拠がほしい、と思わせる点からして、本能的に納得できる「セクシー三大王」とマットのセクシーの性格は明らかに異なる。ならば考えてみよう、マット・デイモンはまなせセクシーか?

まず、「ピープル」誌のコメントを読む。受賞にためらいをみせたマットは、「ピープル」誌にこう答えた。「中年にさしかかった郊外暮らしの父親に、一生に一度きりの自慢のタネを与えてくれるようなもんだよ」「ピープル」誌は次のように解説する。「このたまらないユーモアのセンス(irresistible sense of humor)、がっちりとした家庭を大切に振る舞い(rock solid familyman)、そして心が温かくなるようなビューマニティ(theatricality humanity)。これぞ私たちがマット・デイモンをナンバーワンに選んだ理由である」。

な、なるほど。ユーモアのセンスに家族愛、そしてビューマニティでござる。ビューマニティっていうと大げさだが、誰に対しても同じような態度で接するとか、気分が安定していて人当たりがいいとか、裏表がなく誠実であるとか、ついでに慈善活動もやっている、というようなニュアンス。これが2007年版セクシーの理由である。昨年のナンバーワン、ジュード・ロウはこの選出に対し「クール」と評価「いい仕事を続ける、マット」とエールを送ったという。そういえばこの二人は「リブ

リー」(1999年)で共演した間柄だった。あの頃のジュード・ロウこそまばゆくセクシーに輝いていたものだ。(遠い目)。

マットに戻る。この選出理由の成熟という変化である。「私たちは、ルックスだけのセクシーさになって、もはや魅力を感じない。人間性や家族愛など、温かいハートの持ち主かどうかまできちんと見る、たしかに眼力の持ち主なのよ」と極端にいつてみればそんな選ぶ側の暗黙のアピールが伝わってくるのである。たとえるならば「スマップのなかで誰がいちばんセクシーだと思うか?」という質問に対し、「キムタク」や「香取くん」という美男系を挙げずに、「草彅くん」とビューマニティ系のメンバーを挙げる、みたいな態度だろうか。折しもファッション界では「倫理」や「環境への配慮」の基準をクリアしている商品を選ぶ消費者こそおしゃれ偏差値が高いことになっている。ビューマニティの基準をクリアしている男を選ぶ、というアピールは、女偏差値を上げることにもつながっているのかもしれない。

「14」は作らないといっているが、友情を生かした仕事は続くだろう。少なくとも、そんな強力な友の影が濃厚にちらつく点もまた、マットのセクシーに貢献している。

マットに戻る。この選出理由の成熟という変化である。「私たちは、ルックスだけのセクシーさになって、もはや魅力を感じない。人間性や家族愛など、温かいハートの持ち主かどうかまできちんと見る、たしかに眼力の持ち主なのよ」と極端にいつてみればそんな選ぶ側の暗黙のアピールが伝わってくるのである。たとえるならば「スマップのなかで誰がいちばんセクシーだと思うか?」という質問に対し、「キムタク」や「香取くん」という美男系を挙げずに、「草彅くん」とビューマニティ系のメンバーを挙げる、みたいな態度だろうか。折しもファッション界では「倫理」や「環境への配慮」の基準をクリアしている商品を選ぶ消費者こそおしゃれ偏差値が高いことになっている。ビューマニティの基準をクリアしている男を選ぶ、というアピールは、女偏差値を上げることにもつながっているのかもしれない。

しかし、今回の選出の背景には、たぶん「オーシャンズ」的オアシスも見え隠れする。ジョージ・クルーニーとブラッド・ピットが、マットが選出されるようキャンペーンを熱心におこなっていたというのである。「美女は一人より三人そろえばパワーは三乗になる」という法則にはうなずいていただけだと思うが、セクシーガイだって同じ。一人より三人そろえば最強である。「二大王」の意図は定かではないが、少なくとも今後、オーシャンズ組のセクシーオーラは向かうところ敵なしである。

「服? うーん、マット・デイモンがインタビューなどに登場するときの装いは、どちらかというと、ふつうのアメリカのお兄ちゃんというイメージ? スタイリッシュでモダンな印象はあまりない。でもポロシャツ姿の多少ゆがみ気味でシャイな笑顔は、作り物感がなくて、心に親しみやすくひびく。」

というわけで、マット・デイモンのセクシーから学ぶことがあるとすれば何だろうか? マットは一つ一つの仕事を誠実にこなして成果を挙げ、スタッフや共演者と長く続く友情を築き、家族を大切にしてきた。自分のスタンスを勘違いせずに自虐的に笑ってみせるユーモアと知性の持ち主でもある。ゆがみ気味の(くどい)笑顔に秘めたそんな奥ゆかしい個性こそが、ビューマニティ重視時代のセクシーとして評価されたわけである。

セクシー演出への執着をなくし、周囲の人を大切にしつつやるべき仕事に邁進していれば、結果はそのうちおのずとついてくる。そんな辛気くさい教訓をつい読み取りたくなかった。その辛気くさいさはセクシーか?という議論を招きそうだが、それもまたマットのこのことである。

2007年版セクシーはこんな感じになっております…

Kaori Nakano
服飾史家。人に会って、話を聞き、そして書くのがライフワーク。UOMOが提唱するエレガンスを、毎回人物を切り口にしてわかりやすくひもときます。著書に「モードの方程式」『着るものがない!』(ともに新潮社)などがある。